



メールマガジン版 音楽の世界

第7号 日本音楽舞踊会議 (CMD) 2004年9月12日(日)発行

The COMMITTEE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169--0075 新宿区高田馬場 4-1-6 寿美ビル 305号

TEL:03-3369-7496 FAX:03-3369-6870

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

メールマガジン2004年9月号に発行にあたって 事務局長：中島洋一

前号を4月4日に発行して以来、5ヶ月を経ての発行となりました。発行が遅れ理由は、編集者の私が個人的に多忙だったこと、なかなか原稿が集まらなかったことなども理由ですが、9月に日本音楽舞踊会議主催のコンサートが立て続けに3つ続くので、折角発行するなら、この時期まで待とうという思惑もありました。

ところで、第6号を発行した後、2004年4月には、会員、賛助会員の方々の訃報が続きました。本会の設立に貢献され、事務局長、機関誌編集長の重職を歴任された音楽評論家の矢沢寛氏、声楽部会員の西村(旧姓新川比呂子さん)、元成蹊大学教授で科学者でありながら音楽について造詣が深く、『音楽の世界』の記事も執筆いただいた賛助会員の三輪誠氏。大先輩である、矢沢寛氏と三輪誠氏の追悼文執筆を、やはり大先輩であり、矢沢氏、三輪氏の友人である助川敏弥氏、眞鍋理一郎氏にお願いしました。今号においては評論など重めい文章の掲載は少なめでしたが、この二本の追悼文には、その不足分を埋めてあまりある重さがあると思います。

さて、こメール・マガジン発行の目的は、日本音楽舞踊会議とい団体およびその活動内容を紹介すること、そして機関誌『音楽の世界(活字版)』の内容を紹介することが、主な目的ですが、それだけではなく、読者に自由に投稿してもらい、それを分け隔てなく読んでいただく雑誌として発展させて行きたいと考えています。

もちろん、この雑誌は申し込めば、どなたでも自由に購読出来ますし、購読の打ち切りも自由です。

現在はどなたでも読めるよう、テキスト版として発行しておりますが、テキスト版では写真などもなく、レイアウトもみすばらしいので、近未来においてHTML版と、テキスト版の二本立てにして行く予定です。

繰り返しますがこの雑誌は、原則として投稿フリーで、どなたでも参加出来ます。また、原稿はいつでも受け付けておりますので、自由にご投稿下さい。

メールの宛先：中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

メールマガジン版 『音楽の世界』第7号 内容

1) 追悼文

A. 矢沢寛さんのこと 助川敏弥(代表委員、作曲)

B. 三輪誠さんを悼む 眞鍋理一郎 (賛助会員 作曲)

2) 9月の会主催コンサートのお知らせと報告

- A. ピアノ部会第18回公演 『秋の風・光・ファンタジー』
- B. 今日の作品展 '04 「作曲家：西山龍平氏100百寿記念コンサート」
- C. 20世紀 音の潮流 『様々な音の風景』
- D. 「戦後の童謡をたずねて」を終えて (報告)
- E. 11月25日の声楽部会コンサート「それぞれの秋」について

3) 会員 (賛助会員) のコンサートの報告と予告

- A. オーラJのコンサート・プロデュースを終えて 西 耕一
- B. 11月7日のピアノリサイタルに向けて 浜尾夕美
- C. 音踊劇『火の鳥』について

4) 会と会員のコンサート日程表 (9~12月)

5) 譚盾のピアノ作品における中国語原題について
小山内めぐみ

- 6) 出版案内
花輪一郎著「青春のNHK音楽部」 新風社刊。
小宮正安著『ハプスブルク家の宮殿』 講談社現代新書

7) 機関誌『音楽の世界』のご案内

8) 「日本電子キーボード学会」設立のお知らせ

- 「日本電子キーボード学会」設立趣意書
- 「日本電子キーボード学会」設立大会

- 9) 音楽会評
北川暁子 ベートーヴェンピアノソナタシリーズ
第1回~第3回 畑山千恵子

10) Fresh Convert CMD2005 開催のお知らせ

1) 追悼文

矢沢寛さんのこと

---- 生涯を閉じて ---- 助川 敏弥

矢沢寛さんが亡くなった。4月16日のことである。

矢沢さんは、私と、誕生日が、同年、同月、同日、という不思議なご縁であった。
それだけでなく、私が再入会して以来、余りにおつきあいが深く、世話になったことが多く、いま

追悼文にも書くことが多すぎて困惑するほどである。

矢沢さんは会の創立以来のメンバーであった。そしてつねに運営の中心部にいた。長期にわたって事務局長をつとめ、その後も、事務局長を再任、機関誌「音楽の世界」の編集長、機関誌局長も歴任した。正真正銘の長老であった。いまはもう、これだけの会員歴を持つ人はいない。私は創立時に入会した一人だが、その後、一度退会して1976年に再入会した。その時、矢沢さんは事務局長の地位にあったが、私は、矢沢さんの運営指導ぶりを見て、新しく入り直した会の内情とあり方を知り、親切な説明で勝手に次第に分っていったものだった。

矢沢さんは、つねに柔軟にして飛躍的発想の人だった。世にいう官僚主義型、教条主義型の反対の人である。「音楽の世界」のために機関誌部というものを着想創設したのも矢沢さんであった。1970年代末期にすでに、印刷雑誌の困難時代の始まりのほんの僅かな兆しが見えていた。その状況をいち早く判断して、対応する体制をとったのである。新しい人材を、時には意表をついた選択で登用し、その交渉にみずから労を惜しまず出かけていく。こういう人もいまは少なくなった。ドイツから来日する音楽家たちと協同主催の音楽会を開くことになった時、スポンサー獲得のため、これも故人となった石野富士江さんと三人、私の車で、ドイツ系企業を紹介状なしで片っ端から訪問したことがあった。肉弾攻撃型である。こういう実践型、実戦型の人で彼はあった。

思想的に明確な立場を持った人であったが、それを他人に押しつけることは決してなかった。人との調和をどんな時でも大事にしたのである。彼のこの資質に私はどれだけ助けられたことか。私は彼のこの美德に一番感謝している。独善主義の反対で、むしろ調停型の人だった。それであって、江戸っ子型の気っ風のよさの美学が彼にはあったのだろう。

矢沢さんは、その専門職で大衆音楽の研究者として大きな存在であった。歌謡曲からフォークまで、その該博な知識は生き字引のようなもので、著書「日本流行歌史」は、明治から、第二次大戦までの大衆歌曲をあまねくとり入れて社会背景との関係まで解明した読めども飽きぬものである。続編の戦後編が出たらしいが、すぐ売切れで手に入らない。その後、フォーク音楽にも研究を進め、ここ数年は、アメリカのフォーク歌手、ピート・シーガーと親しくなり、毎年のように夏にニューヨークを訪れていた。環境、平和、など共有する理念の運動にはげんでいた。

ある時から酒をまったくやめて、会議の後、飲みに行く時も一人だけ帰っていくようになった。しかし、煙草はかなりのものだった。とはいえ、人の健康と飲食習慣の因果関係は分らない。矢沢さんは、やりたいことをやりつくし、やるべきことを果たしつくしたと私は信じている。人はいつか死ぬのである。だから、生きている間にどれだけいい生き方をしたかが決め手になる。

矢沢さんは思い残すことない、最もいい生き方をしたではないか。この上なく幸福な人である。私は、至福の生涯を故人とともに喜びたい。

代表委員 作曲 (すけがわ としや)

『三輪誠さんを悼む』

賛助会員 眞鍋理一郎

三輪誠さんは1921年上諏訪に生まれ、旧制静岡高校を経て京都大学で化学を学ばれた。フリュートを吉田雅夫に師事し、京大オーケストラに在籍された。詩人尾崎喜八に私淑し、詩稿も少なからず残されている。東京工業大学で有機化学教室助手を勤め、後に成蹊大学教授になった。筆者が出会ったのは東京工業大学時代の1947年頃だから、約57年来の友人であった。

興味深いのは、彼の広範囲な交友関係である。古い友人として、代表的生物画家の牧野四子吉、詩人でイタリア語翻訳家の文子夫妻がいる。牧野家は京都でも、また東京でも不思議なサロンとして多彩な人物を集めていた。三輪さんは京都以来の常連だった。一昨年春、筆者は彼とともに京都で「牧野四子吉を偲ぶ会」に出席した。

そこには、いわゆる京都学派の生物学者たち、例えば梅棹忠夫たち数人の顔も見えた。四子吉は、戦前白山は南天堂の常連で、そこは林芙美子などの作家やアナキスト、映画人、侠客などの溜まり場だった。筆者は東京の牧野サロンで三輪さんと良く出会った。目白のその家の隣は、

作曲家、渡邊浦人さん邸であった。

(参照『柏木隆法/映画史を 書き換える 俠客伝/新潮 45/1987』『森まゆみ/南天堂のこと/波/1996?』)。

三輪さんの初期の東京の家は目白にあり、板張りの音楽室と畳の部屋の二部屋だった。すぐ近くには柴田南雄さんの邸があり、深夜アポ無しで友人数人と共に柴田邸を訪問したこともある。三輪さんの音楽室には、石見綱(琴古流尺八名手で平尾貴四男に師事)伊藤隆太(表芸は薬学者)や数人の楽人も来訪し、そこでは同じテキストによる歌曲の競作や、室内楽を試演したりした。ピアノはいつも夫人の房子さんだった。

1947年頃、筆者は、声楽好きの友人達と東京男声合唱団を創設し、指導者に清水脩を迎えた。合唱曲『月光とピエロ』などは、その合唱団のために書き下ろされた曲である。当然の事ながら、三輪さんも後年そこに参加した。交友関係の広さやある種の音楽観が尊重され、合唱団の代表幹事として長年尽くすことになる。その合唱団は日本人作曲家、清水脩のほか、前述の柴田南雄、清瀬保二、戸田邦雄、中田喜直、石桁眞禮生、などの書き下ろし作品の委嘱・初演をした。このような所にも彼の影響が強かった。

三輪さんの世代独特の価値観や、ある種の事大主義のようなものとは、よく衝突し激論をした。無教養に見える人物やある種の異文化に対して、彼がそれを軽蔑しているように筆者には見えたのである。しかし、晩年の10数年間は仲直りをした。まあ「故郷に向かう六部の気の弱り」のようなものだろう。優れた教養人として、以上のような音楽趣味を一生通されたことに、ある種の懐かしさと深い悲しみと、また尊敬の念を覚えずにはいられない。

2004年4月27日 賛助会員/作曲 (まなべ・りいちろう)

2) 9月の会主催コンサートのお知らせ

A. ピアノ部会第18回公演 『秋の風・光・ファンタジー』

9月16日(木) すみだトリフォニー小ホール 18:30 ~

一昨年、昨年と、ピアノ部会では「20世紀音の潮流」という、音舞会全体でここ数年取り組んでいるテーマに沿う形のコンサートを行い、20世紀のピアノ曲を紹介してきました。専門の研究機関である本会のピアノ部会は、このような企画性のはっきりした演奏会を行う一方で、バラエティに富んだプログラムでピアノの響きそのものを楽しんでいただくコンサートを提供することも、またひとつの大切な役割と考えています。今回は、モーツァルトから本会会員の作品まで、連弾ありアンサンブルありの多彩なプログラムです。暑かった夏もようやく終わり、ピアノ部会が誇る経験豊富な中堅からベテランメンバーによる演奏で、一足早い秋の香りを満喫していただきたいと思えます。

入場料 ¥3000(会員、賛助会員は無料)

出演者は深沢亮子、北川暁子、古川五巳 他です。

(第18回公演実行委員 新井知子、米持隆之)

16日(木) ピアノ部会第18回公演 『秋の風・光・ファンタジー』

すみだトリフォニー小ホール 18:30 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con02.htm>

B. 今日の作品展 '04 「作曲家：西山龍平氏100百寿記念コンサート」

9月18日(土) 千歳烏山区民ホール 14:00 ~ (作曲部会主催)

西山龍平氏は、日本現代音楽協会設立、日本音楽舞踊会議設立などに貢献した我が国の作曲界の最長老ですが、作曲家としての西山氏の活動は氏の活動の一部に過ぎず、大正時代に東京大学(帝

国大学)を卒業された後、美術家、文筆家、思想家としても幅広く活動されているユニークな方です。

百寿を迎え作曲活動を続けている人は世界的にも例がないと思われ、そのような会員を持つことは、会として誇ってよいことと思ひ、今回は西山龍平氏の百寿を記念したコンサートを企画しました。

西山氏の作品を中心にしながらも、金藤豊、山下希夫、高橋雅光の各作曲家の作品を加え、プログラムを組みました。

(コンサート実行委員：高橋雅光)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con07.htm>

C. 20世紀 音の潮流 『様々な音の風景』

9月22日(水) 19:00開演 すみだトリフォニーホール(小)

昨年の「新ウィーン楽派の音楽とその伝播」に続く当会、公演企画部による20世紀シリーズの第二弾。今回はシェーンベルクとその楽派の作品によるプログラムだったが、今回は20世紀の多様な作品の傾向を反映した(例えば、ローマン派、新古典、民族的、自由な無調と言うように)、会員作曲家二作品をも含むヴァラエティーに富む内容となっている。これら20世紀切音楽を幅広く継続的に紹介してゆく事が新たな21世紀の音楽の発展に繋がるという意味で少しでも音楽文化振興の一助となればと考えている。この企画は「20世紀から現在へ」(仮)と言うようなタイトルで来年以降も続く予定。

+

日本音楽舞踊会議 公演企画部部長 北條直彦

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con04.htm>

D. 「戦後の童謡をたずねて」を終えて(報告：浦 富美)

7月21日、「戦後の童謡をたずねて～ラジオの時代～」(日暮里サニ・ホール・コンサートサロン)は満員のお客様をお迎えして盛況のうちに無事終わることが出来ました。

佐藤光政氏の楽しい司会で、会場もとても和やかな雰囲気、出演者とお客様が一体となり本当に楽しく温かなコンサートになりました。昔懐かしい曲ばかりで、その当時を思い出されたのでしょうか、一緒に口ずさんだり、懐かしそうに、嬉しそうに聴いて下さいました。お客様が素敵な笑顔で帰られたのが、出演者一同本当に嬉しく幸せなことでした。

E. 11月25日の声楽部会コンサート「それぞれの秋」について

(報告：浦 富美)

* 11月25日(木) 19:00開演(18:30開場)

* 牛込筆筥区民ホール(収容人員 約400名)

都営地下鉄大江戸線 牛込神楽坂駅 A1出口徒歩3分

東京メトロ東西線 神楽坂駅 2番出口徒歩10分

* 入場料 ￥3,000(全自由席) 会員：賛助会員は無料

* 出演者

司会：佐藤光政

うた：安味亜由実・浦 富美・金原礼子・小室由美子

芝田貞子・嶋田美佐子・松浦豊彦・渡辺裕子

ピアノ：坂田晴美・島筒英夫・田子篤子・野本哲雄・松山 元

フルート：長堀美佳

* 演奏曲目

薊の花(橋本国彦)

淡雪（平井康三郎）
万葉集・新古今和歌集の和歌による組曲（島筒英夫）
九月の森で（フォ・レ）
ホパック（ムソルグスキ - ）
オペラ＜テッサリア王アドメ - ト＞（HWV22）より
 アドメ - トのアリア「苛酷な運命は」（ヘンデル）
オペラ＜ジュリアス・シ - ザ - ＞より（ヘンデル）
 レチタティ - ヴォ「このようにただ一日のうちに」～アリア
 「わが運命を嘆こう」

他

お問合せ TEL/FAX 03-5951-6034(中村貴代) T
EL/FAX 047-378-0426(渡辺裕子)

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con40.htm>

3) 会員（賛助会員）のコンサートの報告と予告

A. オーラ」のコンサート・プロデュースを終えて（西 耕一）

日本楽器を使って、現代の音楽を創作・演奏している「オーラ」という音楽グループの演奏会企画・構成を担当した。会場選びから、作品の選定などをすべて私が決めた。これまでに、「協力」という形で多数の演奏会企画やCD企画には関わっていたが、一晚の演奏会をすべて「プロデュース」したのは初めてだった。

2002年から中学校、3年からは高等学校で日本楽器が必修になった。オーラ」は、2000年から本格的な活動を始めたが、芸術監督は作曲家の三木稔で、代表は尺八奏者の坂田誠山である。日本楽器を中心に、馬頭琴などアジアの楽器や西洋楽器との協奏や、現代の作曲家への委嘱、舞踊もモダン、日舞、エアロビクス、フラメンコと競演したりなど、創造的な活動を行っている。私は、昨年からはメンバーとなり、これから毎年二回の定期演奏会のうち、一回の企画構成すべてを担当することになった。

演奏会をプロデュースをすると決まって、まずやろうと考えたのは、私の芸術、文化、思想への興味など、すべてを交響させたプログラムであった。もちろん、個人のプロデュースだからといって、自己完結的なものではなく、すべての面に発展性を感じさせる、開かれたプログラミングをする。それに加え「他のやらないことをやる」「聴衆だけでなく、作曲家、演奏家、皆に楽しんでもらう」ことも重視した。

テーマを「共楽の音を求めて」と決めて、現代邦楽が歩んできた歴史の中で数々の作品を生み出し、今も走り続けている先達と、これからリレーのバトンを渡され作品を生み出してゆく若い世代の音楽を選ぼうと考えた。それをもう少し私の方へ引き寄せて、クラシックやロック、民族音楽などのありとあらゆる音楽ジャンルから育ち、みな同時代を生きる作曲家を選んだ。これは、僕がクラシックだけでなく、そういった多様な音楽を愛好してきた歴史も関連している。そして私だけでなく、オーラ」のメンバーが日本楽器を演奏していても、自由に表現活動を行っていることも滲ませようとした。

演奏された曲順で作品を紹介しよう。

まず、一曲目は助川敏弥氏。学生時代から作品を発表し、山羊の会へ参加、作曲家としての活動を

開始した。長年続けた『音楽の世界』編集長、第一法規出版社の山田耕筰全集編集など作曲以外の仕事も知られている。1980年代からは新楽器であったシンセサイザーを使い環境音楽を多く発表。NHK-FM『現代の音楽』のオープニング曲は親しみ易い音楽で喜ばれた。日本の楽器のための作品も多く、今回の尺八独奏のための《風韻》は彼のテーマでもある「風」にちなんだ曲であった。当日は尺八の坂田誠山が、暗闇からスポットライトを浴び出でて、清廉とした吹奏で見事に音楽化した。

二曲目は水野修孝氏。実験的音楽から、ミュージック・コンクレートや即興音楽にはじまり、ジャズの世界を渡り歩き、多様な音楽を吸収した氏は、1980年代には世界最大規模の交響作品《交響的変容》(全4部3時間)を書いて大々的に知られました。ミュージカル、オペラ、交響曲と仕事の幅は広く、ジャズ、ロック、クラシック、アフリカ、日本、あらゆるジャンルを横断する音楽性で親しまれています。今回の《エオリア》はエレクトーンや打楽器にも作曲しているテーマ。甘美なメロディとジャズ感覚が発揮された逸品であった。当日は上記のような音楽性が発揮され、会場を沸かせた。

なお、私の出自が日本文学系だったので、文学も絡めたかった。三曲目は、兼ねてから演奏会に取り上げたいと考えていた眞鍋理一郎氏の「扣鈕」。森鷗外の作詞で、琴歌であった。声楽の曲でもあり、神田のニコライ堂で育ってから、芸大を出て、映画・TV音楽、多様な音楽ジャンルを経て自己を形成していった眞鍋氏が日本の楽器のために作曲したのは、最も伝統的な「三曲」形式の琴歌。これは、観客に強いインパクトを与えるだろうと考えた。実際に、演奏会後のアンケートでも好意的な感想が多かった。

四曲目は橘川琢。彼は三木稔門下であるが、今まで大きな場所で演奏されたことはなく、デビュー作といえるものであった。しかし、彼のこれまでのすべてぶつけるような重量級の大編成楽曲で勝負してきた。ロマン派的要素は強かったが、この現代にこういう作品を書くものは少なく、今後の精進が望まれる。アンケートも観客の評価も、幾分未熟さに見えるものの、言いたい事があり共感できるという意見が多かった。

と、ここまでが前半で休憩を挟み、

五曲目はニューヨーク出身のマーティン・リーガン氏。アメリカ人が日本の楽器のために作曲するのは珍しいことだが、世界へ広がる日本の音楽という意味で興味深かった。西洋人らしく整えられた構成とスッキリした音楽は観客にも評判が良かった。

六曲目は佐藤容子。現在、ハワイに留学中の彼女は持ち前の繊細な和声感覚と美的感性で日本の楽器の叙情美を聴かせてくれた。

七曲目が三木稔の最新作、箏合奏曲「ホタルの歌」。箏に作曲を始めて40年近い歳月を過ごしてきた作曲家ならではの、自然に聴こえて、計算された作品だった。ホタルの一生になぞらえて音楽化するのだが、三木の音楽のエッセンスが総動員されており、心にじわじわ染みしてくる。観客の反応も、最も良かった。

というように、作曲家も、リーガン氏、佐藤氏を加え、人種、性別などの範囲も広がった。年齢も、最年長の眞鍋氏から、最若年の橘川氏まで50歳、半世紀をカバーできた。

作曲家がすべてご健在で、今も活躍中であるというのも有難い事だった。バッハやモーツァルトとは電話も出来ないし、メールも出来ないが、今回取り上げた作曲家たちとは、さかんに交流を持つことが出来たし、全員が練習に付き合ってくれて、本番にも出席してくれた。こんな幸せが他にあってだろうか。

また、同じ芸大卒で池内門下の眞鍋、助川、三木の現在の三者三様と同じ東京音大で三木稔に学んだ佐藤、マーティン、橘川を対応させ、今後を想うのもおもしろかった。この六人を繋ぐ位置に八百万神のようにすべての音楽ジャンルを自らに反映させる水野氏を置いたのも悪くなかったと思う。

とにかく自分の欲張りな興味のすべてが最善の形で交わる位置を模索し、それが自己満足なものではなく、最大限に人種、性別、文化、思想を超えた共感を得られるよう、グローバルに志向した。

結果は満足できるものだったと思う。問題点もいくつか見付き、今後の改善へ役立てるデータ集めが出来た。演奏会後の反応もよく、各所からいろいろな話があり、さらなる活動へのステップになっている。それよりも、なによりも、「楽しい演奏会が出来た」。これだけだと思う。みんなに喜んでもらえれば、何かしら反応はある。継続的にこういうことをしたい。

B. 11月7日のピアノリサイタルに向けて 浜尾夕美

この度のリサイタルにおきましては、日本音楽舞踊会議の皆様にご多大なるお力添えを賜り、心から感謝申し上げます。

いつにも増して、身の引き締まる思いであります。

今回は、対位法的書法の展開が豊かで、後のシューマンを予見するようなベートーヴェンのソナタとショパンのマズルカ、ポロネーズの中でも選りすぐられた珠玉の名作、シューマンの理想の世界が仮面舞踏会の宴で繰り広げられる〈謝肉祭〉を演奏いたします。

これらのすばらしい作品たちと演奏する喜び、音楽の力を享受する喜び、そして葛藤の日々を過ごしています。

リサイタルでは、皆様と喜びを共有できますよう切に願っています。

ご多用中とは存じますが、皆様にご来聴の上ご高評賜りたく、何卒宜しくお願い申し上げます。

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con01.htm>

C. 音部劇『火の鳥』について

イ) 作曲家の私が脚本、演出まで手がけることになった理由

この作品は、1993年から始まった『舞踊と電子音楽の夕べ』の終着点であり、新たに始まる、視聴覚総合芸術創作プロジェクトの出発点となる作品です。作曲家と舞踊家との対等な協力関係をベースに始められた『舞踊と電子音楽の夕べ』の催は、過去三回開催され、計13作品を生み出し、その中には何回か再演された作品もありましたが、我々はまだまだその成果に満足出来ませんでした。異なったジャンルの芸術家が協力し合って一つの作品を生み出す試みは、いままでも我が国のみならず、全世界において数限りないほど繰り返されて来ましたが、それはスリリングで、胸躍る試みではありますが、単に異なるジャンル芸術家が協力しあいさえすれば、より説得力のある優れた舞台芸術作品を生み出し得るかということ、必ずしもそうではありません。それぞれのジャンルの芸術家がお互いに遠慮して自分のジャンルの枠にただ閉じこもってはいけません。一体感のある作品は生まれません。より迫力のある作品を生み出すには、それぞれの芸術家が自分のジャンルの枠を超え、相手のジャンルにまで踏み込んで主張しあえる勇気を持つことが必要になるでしょう。しかし、そうかといって全体を見通せずただ主張しあうだけでは、結果的にバラバラで一体感のない作品に終わってしまいかねません。

もし、音楽、舞踊、演劇、文学などの諸芸術について、それを総合しうるような幅広い理解力と深い洞察力を持ち、作曲家、舞踊家の間に立って制作作業の核としての役割を担うような優れたクリエイターの存在し、そのような人物を中心に作品制作を進めることが出来れば、一体感、そし

て説得力のある作品の制作が可能になるかもしれません。我々はそのような人物の出現を待ち望んでおりますが、なかなかそういう人物とは出会えません。あるいは、現代の文化的、精神的土壌が、そういう人物を生み出しにくくしているのかもしれません。

しかし、やはりより一体感のある作品を創り出すためには、単に異なったジャンルの芸術家が協力し合うだけでなく、全体を見渡し、その作品創造に全般において、中心核の役割を担う人間が必要なことは事実です。もし、前記したような人材が見つからない場合は、徹底的にディスカッションを積み重ね、作品毎に、中心人物を決めて行く方法もあります。そして、音部劇『火の鳥』においては、私とその役割を担うことになりました。作曲が専門の私が、作曲だけではなく、脚本、演出まで手がけることになったのは、そのような理由からです。私は演劇はかなり見ておりますが、ダンスの勉強をしたこともなく、舞踊については素人と言ってよいでしょう。その私が演出を手がけることについては、私本人もそうですが、舞踊家の方々にも不安はあるでしょう。しかし、この作品の演出について、私なりに明確なビジョンを持っているつもりですし、振り付けについては、経験豊かな、井上恵美子さん、馬場ひかりさんに担当していただくことになっていきますし、さらに舞踊全体について、大ベテランの芙二三枝子さんに監修していただくことになっております。みんなで意見を戦わせあいながら協力して行くことで、我々が意図した舞台が出来上がることを確信しております。

ロ) 音舞劇『火の鳥』というタイトルにした理由について

この作品は、手塚治虫の漫画『火の鳥』の『黎明編』、『未来編編』を題材にして、それを舞踊向きに脚色したものです。音舞劇というサブタイトルについて、そのまま音楽と舞踊による劇、と解釈していただいても、大きな違いはないと思います。『劇』という言葉が入ることについては、舞踊界の人、特にモダンダンスの領域で活動する舞踊家の方々には抵抗があることでしょう。モダンダンスの場合は、演劇などとは違い、筋書きを追うのではなく、抽象的な肉体表現を通して、直に観客の情念、感性に訴え、そのつらなりの中で、思想的なものまでも表現しようとする芸術であるからです。

しかし、音舞劇『火の鳥』は、今日の一般的な現代舞踊作品にはあまりみられない、明確なストーリー、劇的構成をとまっています。しかし、ストーリーは、あくまでも入れ物にすぎません。この作品が、『劇』で終わらず、『音楽と舞踊によるドラマ』になるためには、ダンサーが、ストーリーを持つ劇という入れ物に負けず、それと闘い、踊りと音楽の力で、人間の内面的なものまで深く表現し、『命』、『存在』、という目に見えない形而上的な世界を感じさせる作品にまで高めてくれることを願っていますし、音楽もそのような力を持つものでなくてはならないでしょう。さらに、照明、映像などのビジュアルな要素が、舞踊、音楽と相乗効果を起こせば、観客に強く訴えかける作品になると思います。

ハ) ストーリー（入れ物）の概略

《第1部》

病に冒された妹のヒナクに、不老不死の火の鳥の生き血を与えて救おうと、青年（ヒナクの兄）が火の鳥に挑むが、炎に焼かれて死ぬ。

よそ者のグズリがクマソの民に捕らえられ、クマソの村に連れてこられる。グズリは献身的にヒナクの病の治療を試みる。ヒナクは完治し二人の間に愛が芽生える。二人の愛は村落の民から容認され、婚姻を祝う宴が盛大に開かれる。しかし、村落の民が酔いと踊りで疲れた頃を見計らって、グズリは村を抜け出し、邪馬台国の者と密会する。彼は邪馬台国の間者だったのだ。邪馬台国の軍はクマソの村に夜襲をかけ、クマソの村人達は皆殺しにされる。

グズリはヒナクを連れて逃げようとするが、グズリの手引きで仲間達を皆殺しにされたヒナクは、深い絶望、悲しみ、怒りに襲われ、グズリを激しく拒否する。懸命に自分の変わらぬ愛を伝えようとするグズリともみ合いになるが、やがてヒナクはグズリを受け入れる。

場面が変わり、永遠の命を手に入れようという欲望に取り憑かれた卑弥呼に率いられた邪馬台国

の軍が火の山に棲む火の鳥を襲う。一本の矢が火の鳥に命中するが、しばらくして火の山が火を噴き、邪馬台国の軍は全滅する。グズリとヒナクは逃げまどうが、噴火に巻き込まれ、岩窟に閉じこめられる。もうダメかと絶望するグズリ、しかし陽の光が差し込む地点を見つけると、そこには草が生えていた。そして、火の鳥の声も聴こえる。そこは火の鳥の巣だったのだ。二人は生き続けて行くことを決意する。

それから20年ほど立ち、新たに生んだ二人の子供は大きくなり、特に長男のタケルは逞しく成人している。タケルは岩壁をよじ登り外の世界に出ることを決意する。家族の期待を一身にあつめ、タケルは岩壁を登る。途中で意志がくじけ、落下しそうになるが、火の鳥に励まされ、とうとう登り切る。タケルの目には広い外の世界が開けている。(タケルが人類の再生の意志と努力を象徴する存在として描かれているのはいうまでもない)

《第2部》

生存を禁止されているムービー(宇宙動物)であるタマミを愛してしまったマサトは非難と危険を避けるため、タマミを連れて国を離れ、猿田博士の研究所にたどり着く。

A国とB国はムービーを匿った件が発端で対立する。どちらの国もコンピュータに最終的意志決定を委ねているが、双方のコンピュータの意志決定により戦争をはじめてしまう。強烈な光とともに二つの国は一瞬のうちに消滅し、猿田研究所にも影響が及び、猿田は死に、タマミも衰弱し、やがてマサトに抱かれたまま死ぬ。マサトは悲しみと絶望のあまり自殺しようとする。しかし、火の鳥が現れ、マサトは死なない生命を授けられる。死ぬことが出来なくなったことを悩むマサト。

タマミを忘れることが出来ないマサトは、人工的にタマミのを合成しようとするが巧く行かない。落胆するマサト。すると再び火の鳥が出現し、生命の誕生から始まる地球の生命の歴史を最初からやり直しになることを告げ、マサトに監視役を命ずる。ここから30億年かけて、生物はアメーバのような原始生命体から次第に細胞を持つ動物、魚類、両生類、は虫類、ほ乳類と進化し、やがて再び人類の出現まで辿りつく。火の鳥は30億年を耐えたマサトをやさしく迎え入れる。マサトは火の鳥の羽(コスモゾーン)に吸い込まれ、そこでタマミの魂との再会を果たす。二つの魂は他の多くの魂とともにコスモゾーンで合体する。舞台奥で、時空を超えたコスモゾーンでの命の踊りが続く中、下手では30億年前の第一幕の最初とまったく同じ場面、つまり青年が火の鳥と立ち向かう場面となる。火の鳥の声がする。「人間達よ、今度こそ命を正しく使ってください……」その声は残響となって、宇宙空間全体に広がって行く。

二) スタッフ&キャスト

公演日時&会場

2005年1月13日(木) 19:00 ~ 21:00 東京芸術劇場 中ホール

演目: 音舞劇 『火の鳥』 原作: 手塚治虫、脚本: 中島洋一

スタッフ

監 修: 芙二三枝子

作 曲: 中島洋一

演 出: 中島洋一

舞台監督: 森荘太

照 明: 杉浦弘行

音 響: (株)フォンテック

第一部振付: 井上恵美子、第二部振付: 馬場ひかり

出演:

秋山理恵(声楽)、井上恵美子、馬場ひかり、坂木真司、天野美和子

その他、井上恵美子ダンス・カンパニー、

芙二三枝子舞踊団所属の舞踊家が多数出演。

チケット販売開始日 10月1日予定

http://www007.upp.so-net.ne.jp/yoichi_n/

4) 会と会員のコンサート日程表

【9月】

4日(土) 『矢沢寛さんを偲ぶ会』新大久保 労音会館ホール 14:00 ~
8日(水) 草野明子 ピアノリサイタル 東京文化会館小ホール 19:00 ~
全自由席 4000円

9日(木) ~ 12日(日)

『マイチエーホフ』芙二三枝子現代舞踊公演
天王州スフィアメックス 9:00 ~ 全自由席(前売り4000円)

16日(木) ピアノ部会第18回公演 『秋の風・光・ファンタジー』
すみだトリフォニー小ホール 18:30 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con02.htm>

18日(土) 今日の作品展 '04 (作曲部会主催)
「作曲家:西山龍平氏100百寿記念コンサート」
千歳烏山区民ホール 13:30 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con07.htm>

21日(火) 北川暁子ベートーヴェン連続演奏会
浜離宮朝日ホール 19:00 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con12.htm>

22日(水) 20世紀の音の潮流 『20世紀の音楽~様々な音の風景』
すみだトリフォニー小ホール 19:00 ~
3000円 会員、賛助会員 無料

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con04.htm>

24日(金) 泉千春ソプラノリサイタル 津田ホール 19:00 ~ 全自由席4000円
<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con33.htm>

【10月】

1日(金) 「泣いて笑って30年」~矢澤見どりのすべて
新大久保労音会館ホール 18:30 ~ 全席自由4000円

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con43.htm>

11日(月) 深沢亮子「モーツアルトの演奏とお話」
フェリスホール(山手) 14:00 ~ 会費:1000円

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con20.htm>

20日(水) 北川暁子ベートーヴェン連続演奏会
浜離宮朝日ホール 19:00 ~

【11月】

1日(月) 『音楽の世界』11月号発送 声楽部会

7日(日) 浜尾夕美ピアノリサイタル
日本大学カザルス・ホール 14:00 ~
全自由席 3500円

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con01.htm>

8日(月) 運営委員会 会事務所 19:00 ~

20日(土) 北川暁子ベートーヴェン連続演奏会 浜離宮朝日ホール 19:00 ~
<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con12.htm>

深沢亮子デビュー 50 周年記念コンサート

東金文化会館大ホール 14:30 ~

全自由席：一般 2000 円 / 高校生以下 1000 円

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con16.htm>

25 日（木） 声楽部会コンサート『それぞれの秋』

牛込笹塚区民ホール 18:30 ~

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con40.htm>

【12 月】

4 日（土） 深沢亮子ピアノリサイタル

松尾楽器ホール 14:00 ~ 全席自由 4000 円

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/con34.htm>

7 日（火） 運営委員会 会事務所 19:00 ~

17 日（金） 音舞会ビックコンサート（深沢亮子他）

音楽之友社ホール 19:00 ~

20 日（月） 北川暁子ベートーヴェン連続演奏会 浜離宮朝日ホール 19:00 ~

25 日（土） 「童謡・唱歌 100 年の歴史 パート 4」

シビックホール 14:30 ~

5) 譚盾のピアノ作品における中国語原題について

小山内めぐみ

友人から、「知人のピアニストが譚盾の作品を演奏するので中国語原題を知りたい」というメールが届いた。ちょうど、昨年夏に上海で聴いた演奏会のプログラム中に、この作品に対する譚盾の作品解説が載っていたので、解説の日本語訳と共に、原題を送ってみた。すると、「英題から直訳された日本語の題名と異なっていたので確認出来てよかった」という返信が即届いた。作品の印象が、その題名に左右されることを考えれば、これは看過できぬ問題ではないか。

実は、中国人音楽家の英語表現を真に受けてはいけない……というのは、中国語を解する日本人音楽プロデューサー関係者の密かな常識ではある。私も譚盾と関わるようになって、中国人の本音は中国語でしか聞き得ない実態を痛感させられるようになった。英語で話している時と、中国語を話している時の譚盾は全く違う。勿論、本人は意識しているわけではなからうが、傍から見るとビックリするほど変化する。英語を喋っている時の彼は当り障りの無い(?) 国際人だが、母国語を話し出すと忽ち自国文化に絶対の自信と誇りを持つ、打たれ強い湖南人に戻る。もしかしたら、彼等は、深い意図は母国語でしか表現できないと思っているのかもしれないし、或いは、英語圏の連中なんかに中国文化が理解出来るわけないと最初から軽んじているのかも？

それはともかく、我々日本人は彼等と漢字文化を共有するのだから、十分この利点の恩恵を受ければいいのだ。ところが、愚かにも、多くの日本人音楽家が中国語の確認を怠り、恥を晒している。

例えば、我が手元には、譚盾の『交響曲 1997』の CD (SONY、1997 年) が 2 種類ある。一方は、譚盾の中国語原文が載っている輸入盤だ。両者を比べると、日本版が英語を直訳しているに過ぎないことがよく解かる。例えば、日本版における譚盾の解説文の題名は、「夢の循環と再統合」である。なんじゃ、こりゃ? というような変な日本語だ。少なくとも、我々は普段こんな奇妙な日本語は使わない。これは、英文「Dream Circle and Reunification」を直訳したに過ぎないせいだ。しかし、輸入盤における譚盾の中国語解説文の題名は「夢、輪廻と回帰」である。これを日本語に直訳すれば、文字通り「夢、輪廻と回帰」であり、この方がずっと自然な日本語だ。何しろ、輪廻も回帰も日本人が日頃慣れ親しんでいる用語なのだから。おかげで表現の意図もずっと理解出来るではないか。

つまり、この例を一つとってみても、中国語原文を確認せず、英文からのお手軽ちゃちな日訳で済ますことが如何に愚かしいか、十分証明されるだろう。(注) さて、問題の譚盾のピアノ作

品とは、郎朗（ランラン）のCDでお馴染みの「八幅の水彩画による追憶“家”」である。まず、ここでは上海で行われた郎朗のリサイタルのために譚盾が書いた解説を訳出し、譚盾の作曲モチーフを確認しておこう。

「根源から未来へ - 郎朗と我が「八幅の水彩画による追憶“家”」について - 」

譚盾

私が郎朗に出遭ったのは2年前の大晦日の晩餐会だった。新年のカウントダウンが近づく中、皆にせがまれて郎朗はピアノを一曲聴かせてくれた。その余りの美しさに皆うっとりしていたが、私は驚愕を隠せなかった。何しろ、それは、郎朗がまだ生まれていない二十年前に私が作曲したピアノ処女作品だったのだから。この「雲」と名付けた作品は、まるで郎朗に捧げられたかのような音楽だった。彼の流れる水のような清純な美しい音色から、私は我が内奥の音を聴き、故郷の土の匂いを嗅いだ。しかも、彼の演奏はまるで詩人のように長い物語を語り、人類の魂の声と大自然の静寂を聴かせてくれる。彼は、私に、根源から未来への道を気付かせてくれたのだ。まさに、彼こそ、当代傑出した天才ピアニストの一人だ。

さて、「八幅の水彩画による追憶“家”」は、1978年、故郷湖南を離れ、北京の中央音楽学院に学んでいた頃に書いた処女作である。当時、文化大革命が終息し、中国もようやく自由になったので、私は、西洋のクラシック音楽と現代音楽を必死で学んでいた。だが、同時に、我が心の底に眠る故郷の民謡や思い出をどうしても切り捨てられなかった。こうした中で、我がピアノ処女作品が生まれた。そう、だから、この作品は我が郷愁の記録なのだ。

この作品は以下の八部の小題からなる。

1、月蝕(Missing Moon) 2、逗豆(Staccato Beans) 3、牧童歌(Herdboy Song) 4、尼姑思凡(Blue Nun) 5、古葬(Ancient Burial) 6、雲(Floating Clouds) 7、紅色荒野(Red Wilderness) 8、太陽雨(Sunrain) このうち、4曲(2, 3, 4, 8)は私の大好きな湖南民謡に基づくが、他の4曲(1, 5, 6, 7)は我がオリジナル。この作品は、舞踏家・紅青が気に入って現代バレエ「思い出」に編集しなおした。その後、ピアニスト・傅聡が紅青から採譜して4曲(2, 3, 4, 8)を演奏した。90年代には、ピアニスト・陳霊と舞踏家・曾筱竹も現代バレエに編集した。そして、2001年、私を感動させた郎朗の求めに応じ、演奏会用に書き改めた次第である。

2003年3月3日 (注)

つまり、この作品の個々の題名は、譚盾の郷愁が詰まった命名だと判断出来る。ところが、友人の指摘では、中国語原題とは異なる日本名が訳されていると。確かに、郎朗のCD(UCCG、2004年)も違う。ここでは、誤解を招きそうな2題名を取り上げて検討したい。

まず、原題「月蝕」は郎朗のCDでは「欠けた月」となっている。これはMissingの直訳だろうが、何とも軽率なまずい訳としか言いようが無い。これでは、単なる月の満ち欠けを表すだけで、月蝕の特殊性を現せない。特に、月と言ったら、中国人は故郷を思うし、月の様相はそのまま人間の喜怒哀楽を示し、その感情移入の程は日本人の比ではない。Missingの意味から探れば、まさにこれは皆既月食と言えようか。郷愁誘う月を天に見出せぬやるせなさが現されているとしたら、私なら「闇夜」とでも訳したい所だ。

さらに、「尼姑思凡」は、郎朗のCDでは「青い衣の尼僧」となっている。英語の直訳だが、勿論、これでは何のことだか想像もつくまい。実は、中国語原題の意味は、出家した尼僧がかつての俗世間を懐かしむ意味。しかも決して否定的な意味はないので、敢えて意識すれば「懐かしき日々」とでもなろうか。故郷を離れて、北京という中央都市で禁欲的(?)に西洋音楽を学ばされている譚盾の心が現されているなどと言ったら、深読みに過ぎるか。

いずれにせよ、譚盾自身の解説からは、作曲当時の西洋文化と自国文化との間で葛藤に揺れる彼の心が読み取れるのだから、命名にその心情が表れていると判断するのは強ち間違いではあるまい。日本名でも、それが汲み取れる訳が望ましいと、私は考える。

勿論、作曲家がどんなモチーフで作曲しようと、演奏家は独自の解釈で演奏していいはずだ。そこから、作曲家が想像し得なかった世界が広がることこそ、音楽という芸術の醍醐味でもあるのだ

から。だからこそ、作曲家の意図を誤って伝えかねない行為は避けられるべきである。我が友人の知人ピアニストが作曲家の原題を確認したのは、自ずと音楽への姿勢を現しているだろう。原題確認の手間を省く多くの日本人演奏家に比べれば、その演奏の質の差は自ずと明か。それは、心ある聴衆がちゃんと聴き取ってくれるだろうから、敢えて、ここに彼の名前は明かさない。

以上の意味で、中国人やその他、漢字名を持つ演奏家の名をカタカナ表記する無神経さにも、ほとほと呆れる。だから、私は、タン・ドゥンと書かれた譚盾論は一切信用しない。筆者の質が自ずと想像されるから。となると、現代日本の音楽評論界で信用できる人材なんて皆無と言う事になるうか。やれやれ……。

注 何と、この日本版には明らかな誤訳もある。譚盾は、解説で「純真な子供達の歌声は深く過去を回顧している様に聴こえ、いにしへの編鐘は輝かしい未来を詠っている様に聴こえるのだ。」と、如何にも譚盾らしいひねった文章を綴っている。ところが、日本版の訳は「子供たちの声は未来を歌っているように聞こえる。編鐘の音を聴くと、過去の歌を歌っているように感じる。」である。これじゃ超平凡、譚盾らしさは微塵もない。譚盾の意図は全然伝わらない。かつて SONY に誤訳をメールで指摘したが音沙汰なし。延々と間違っただま出版され続けているのだろう。日本の音楽業界って大手になればなるほど信用出来ないと思いが、これも、その例では？

注 上海大劇院創立5周年記念演奏会・朗朗ピアノリサイタル(2003年9月3日)プログラムより。我が稚拙な訳文に誤訳を見つけられた方は、どうぞ御一報を。

6) 出版物のご案内

花輪一郎著「青春のNHK音楽部」。新風社刊。 1200円。150頁。

日本音楽舞踊会議賛助会員で、元NHKプロデューサーの花輪一郎さんが著書を出しました。「音楽の世界」に、1985年から30回にわたり連載した、「思い出の人、思い出の番組」を単行本にまとめたものです。

終戦直後のGHQ管理時代からの時代の証言です。その後、楽壇の主要人材となった人たちの青春奇談が満載されています。(助川敏弥)

小宮正安著『ハプスブルク家の宮殿』講談社現代新書 700円

私事で甚だ恐縮ですが、このたび講談社現代新書より四冊目の本を上梓いたしました。題名は『ハプスブルク家の宮殿』です。

ヨーロッパ二大宮殿の一つ、ウィーン・シェーンブルン宮殿の歴史を通じ、この宮の主であったハプスブルク家とその帝国の興亡を描いてみました。尚、定価は税抜きで700円となっております。

もしもご興味がおありでしたら、ご笑覧いただくと幸いと存じます。

(ドイツ文学：小宮正安)

7) 機関誌『音楽の世界』のご案内

最新号と、バックナンバー前2号の概略をお知らせします。

『音楽の世界』2004年8/9月合併号の内容(最新号)

論 壇 西山龍平いごっそう伝(高橋雅光)
特 集 ハイブリッド・オーケストラ
~ 電子楽器との新しい強調の形を求めて
(中島良能、大森誠、三澤洋史、川村敬一、出田敬三)
好評連載 エレクトーンから見る 21 世紀の音楽と教育(阿方俊)
フランス歌曲演奏史 荻野綾子について(金原礼子)
コンサートプログラム 今日の作品展 '04 ~ 平和への祈り ~
作曲家 西山竜平 百寿記念コンサート

『音楽の世界』2004年7月号の内容

論 壇 明治からの教育の結果・・・(ないとうひろお)
追悼対談 科学と音楽と芸術と(三輪誠 助川敏弥)
好評連載 フランス歌曲演奏史 荻野綾子について(金原礼子)
コンサートプログラム beyond Orchestra
ジャパン・エレクトロニック・オーケストラ第12回演奏会

『音楽の世界』2004年6月号の内容

論 壇 矢沢寛さんのこと(助川敏弥)
『音楽の世界』が果たしてきたこと(矢沢寛)
インタビュー ヴァイオリニスト・佐藤久成さんに聞く(野口剛夫)
好評連載 エレクトーンから見る 21 世紀の音楽と教育(阿方俊)
フランス歌曲演奏史 荻野綾子について(金原礼子)
言葉の科学と音楽(大久保靖子 添田里子)
音楽のあるレストラン(喫茶「麦」)
レポート 『Fresh concert -CMD2004-』を終えて(中島 洋一)
『Fresh concert -CMD2004-』批評 (浅岡弘和)

8)「日本電子キーボード学会」設立のお知らせ

「日本電子キーボード学会」設立趣意書

今日の音楽のすばらしい発展は、多くの国々の技術者によって作られ伝えられてきた楽器と、それらの音資源(sound resources)に触発されて様々な創造・表現に務めてきた作曲家や演奏家、および著しい広がりを見せているメディアの貢献が大きいといわれています。これらの中にあって日本の誇るハイテクの結晶ともいべき様々な電子楽器は、アコースティック楽器の生産額を凌駕するようになり、音楽家の諸活動のみならず、幼児から高齢者に至る学習者「みんなが」「いつでも」「どこでも」行える「様々な音楽活動」すなわち生涯学習の一環としての音楽学習の展開にも貢献して、これらの人々の音楽的表現意欲を増大し、その活動の輪を拡大してきております。

既に周知のとおり、最新の電子キーボードは、コンピュータ機能を内蔵してバーチャルサウンドを持ち、未来を指向したサイバーキーボードとも称され、優れた音の多彩なサンプリングなどを生かした「創作機能」「アンサンブル・シミュレーション機能」「教育機能」を持っております。それらの機能を十分に活用することにより、新しい響きを追求し豊かな音楽表現を求め、多様な音楽活動の

さらなる活性化に貢献しています。特に、国内や海外における国際的なイベントに於いて、「アンサンブル・シミュレーション機能」を活用してアコースティックな楽器との共生をはかり、協奏曲やオペラ、さらには民族音楽の演奏さえも、電子オルガンによるオーケストラ的協演という形態を生み出し、文化的に多様なプログラムによる演奏が提供されております。

拡大された音楽教育の現場に目を移せば、この電子キーボードの多機能・多音色という特色に着目し、初等教育から高等教育、さらにはこれらを含めた生涯学習に至るまで、音楽表現・音楽創りのための発展的な学習への活用が行われるようになってきております。特に専門教育に於いては、12の音楽大学、21の音楽短期大学、26の音楽高等学校に、電子キーボードを代表する電子オルガン関連の学科が開設され、この楽器の効果的な指導法の開発或いはスコアリーディング方式による新しい響きや豊かな音楽的表現を求めて、専門教育およびアマチュア音楽活動などの活性化に大きく寄与してきています。また、演奏分野に於いては、電子オルガンのオーケストラ的協演によるピアノ協奏曲やオペラ・ミュージカルなどの上演が、コンサートやまちづくりの一環として全国的に行われ、一つの社会現象にもなってきております。

このように各地の学校や地域社会に於いて個別に行われてきた、これらの電子オルガン関係者の意欲的な研究・実践や情報などの交流を活発にし、さらには新しい響き、豊かな音楽表現、多様な音楽創りのための電子オルガンや M.L. (ミュージック・ラボラトリー) における電子ピアノの効果的活用方法などを、作曲家および電子キーボードの指導者・技術者により広い視野から協調的に研究推進することが必要となってきました。そして、ボーダーレス化する芸術の中において、エレクトロニクス時代といわれる音環境、さらには、生涯学習社会を迎えて学習ニーズの多様化への対応を

迫られている小・中・高校の教育及び専門教育やまちづくりにおける望ましい音楽学習活動の活性化に向けて、多くの関係者によりグローバルな情報交流も含め、総合的に研究する場として「日本電子キーボード学会」の設立を提唱するものであります。

2004年8月

日本電子キーボード学会設立準備委員

(順不同)

吉田泰輔 / 代表	国立音楽大学理事長	音楽学
下八川共祐	昭和音楽大学理事長	オペラ制作
高萩保治	東京学芸大名誉教授	音楽教育
出田敬三	平成音楽大学学長	作曲・指揮
中村 誠	浜松学芸高等学校学校校長	学校経営
小川秀樹	広島音楽高等学校学校教頭	管楽器・指揮
遠藤雅夫	日本現代音楽協会理事	作曲・ML
野口剛夫	昭和音楽大学講師	音楽学・指揮
森松慶子	国立音楽大学講師	音楽学・電子オルガン
赤塚博美	洗足学園音楽大学講師	作編曲・電子オルガン
海津幸子	昭和音大 / 洗足音大講師	ピアノ・電子オルガン
柴田 薫	昭和音大 / 聖徳大講師	音楽教育・電子オルガン
大串和久	鴻巣女子高等学校教諭	音楽教育・ML
安藤恭子	鶯谷高等学校学校講師	音楽教育・電子オルガン
初山正博	世田谷区上北沢小学校教諭	音楽教育・電子楽器教育
阿方 俊	昭和音楽大学講師	音楽教育・電子オルガン

「日本電子キーボード学会」設立大会

と き : 2004 年 10 月 2 日(土)
10:30 ~ 12:00 学会設立準備委員会
12:00 ~ 13:00 受付
13:00 ~ 13:30 基調報告
13:30 ~ 14:30 研究発表
14:30 ~ 16:00 学会設立準備委員および参加者による研究協議
16:00 ~ Tea Time

ところ : 昭和音楽芸術学院(川崎市麻生区万福寺 1-16-6)
ラ・サーラ・スカラ
小田急線「新百合ヶ丘」(新宿より急行で 26 分)北口下車 徒歩 1 分

「日本電子キーボード学会」設立大会

「基調報告」

- ・ 音楽教育界における電子キーボード学会の必要性とその役割
高萩保治 / 東京学芸大学名誉教授
- ・ 21 世紀の音楽における電子楽器のもつ意義と課題
吉田泰輔 / 国立音楽大学理事長

「研究発表」

- ・ 中国における電子オルガン音楽の現状と課題
朱 磊 / 上海音楽学院現代楽器音楽科主任・副教授
- ・ M.L.(ミュージック・ラボラトリー)の学校教育における可能性
大串和久 / 埼玉県立鴻巣女子高等学校教諭
- ・ 小学校における電子楽器を活用した効果的授業
初山正博 / 東京都世田谷区立上北沢小学校教諭

「研究協議」

- ・ 電子キーボード学会設立準備委員および参加者による研究協議

参加申し込み・問い合わせ

事務局: 阿方 俊 〒215-0004 川崎市麻生区万福寺 1-16-6 東成学園内

E-mail: agata@tosei-showa-music.ac.jp Tel: 044-953-1230 Fax: 044-953-6580

9) 音楽会評

北川暁子 ベートーヴェンピアノソナタシリーズ

第 1 回 ~ 第 3 回

畑山千恵子

北川暁子 ベートーヴェンピアノソナタシリーズ、第 1 回
——デビュー 40 周年記念

1964 年にデビューリサイタルを開いてから 40 年目にあたる北川暁子がベートーヴェンシリーズと題して、ピアノソナタ 32 曲全曲、ヴァイオリンソナタ、ピアノ協奏曲に取り組むこととなった。この日は、ピアノソナタシリーズ第 1 回で、第 1 番、作品 2 - 1、ヘ短調、第 15 番、作品 28、二長調「田園」、第 29 番、作品 106、変口長調「ハンマークラヴィーア」が取り上げられた。

第 1 番。ベートーヴェンのソナタの始まり。ソナタ全曲演奏会を行うピアニストたちは、この作品

を演奏する際、この作品の演奏には神経を集中させている。演奏のできによって、これからのシリーズを左右することとなる。そうした意味から見た場合、まずは成功だった。

第15番「田園」。大自然の息吹に満ちた味わい深い演奏。しかし、何箇所かキズが生じてしまった箇所があったことが惜しい。第29番「ハンマークラヴィーア」。ベートーヴェン後期の深遠さ、スケールの大きさが伝わってきた。ここでも、キズが生じてしまったことが残念だった。

全体に深い味わいに満ちていても、些細なキズが生じたことで、演奏として今一步のできだった。次回に期待しよう。

(4月20日 浜離宮朝日ホール)

北川暁子 ベートーヴェンピアノソナタシリーズ、第2回
――デビュー40周年記念

北川暁子のベートーヴェンピアノソナタシリーズ、第2回目は、第4番、作品7、変ホ長調、第8番、作品13、ハ短調「悲愴」、第9番、作品14-1、ホ長調、第21番、作品53、ハ長調「ヴァルトシュタイン」の4曲であった。

今回のコンサートでは、第8番「悲愴」、第9番での円熟した、味わい深さ、第21番「ヴァルトシュタイン」の素晴らしさが光った。ことに、第9番は、学習者向けの作品としてよくひかれるものの一つであるとはいえ、全体として、味わい深い、円熟した演奏で、印象に残った。また、第8番「悲愴」で見せた円熟した味わいも捨てがたい。

第21番「ヴァルトシュタイン」は、スケールの大きさ、第2楽章序奏部の沈潜した、深みのある音楽作りが絡み合った、素晴らしい演奏であった。

アンコールでは、6つの変奏曲、作品34が演奏された。主題、それに続く6つの変奏の性格付けは無論のこと、ここでも味わい深い音楽が展開され、コンサートの余韻をじっくりと味わうことができた。

惜しむらくは、第8番「悲愴」でちょっとしたキズが生じてしまったことである。とはいえ、こうしたキズも些細なものにすぎない。

(5月20日 浜離宮朝日ホール)

北川暁子 ベートーヴェンピアノソナタシリーズ、第3回
――デビュー40周年記念

今年で、デビュー40周年を迎えた北川暁子のベートーヴェンピアノソナタシリーズ、第3回目は、第3番、作品2-3、ハ長調、第13番、作品27-1、変ホ長調「幻想風」、第20番、作品49-2、ト長調、第23番、作品57、ヘ短調「熱情」が演奏された。

この日は、第13番「幻想風」、第23番「熱情」が聴き応え十分のできであった。まず、第13番。これは、第14番「月光」とともに、ベートーヴェンの新しい道を示している。北川は、そうしたベートーヴェンの新しい試みを自分のものとして、聴き手に伝えていた。第23番「熱情」は、円熟した音楽作りが深い感動を呼んだ。

これに対して、第3番は無難な音楽作りだったものの、第20番の第1楽章では、残念なキズが生じてしまった。

アンコールは、ロンド、ト長調、作品51-2。味わい深く、コンサートの余韻をじっくりと楽しめた。

(6月21日 浜離宮朝日ホール)

10) Fresh Convert -CMD2005- 開催のお知らせ

日本音楽舞踊会議では、昨年、本年に引き続いて、来年度も Fresh Convert -CMD2005-を開催いた

します。

開催日および会場は以下の通りです。

開催日時：2005年3月30日（水） 19:00～
会場：めぐろパーシモンホール（小）

出演者募集要項につきましては、以下のページをご覧ください。

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/kai-info/news-part/shinjin-con0405.htm>

本年度開催の、Fresh Convert -CMD2004-関連の情報をご覧になりたい方は以下のページにアクセスしてください。

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh2004info.htm>

2004年9月14日 文責：中島洋一

メールの宛先：中島洋一 yoichi_n@wa2.so-net.ne.jp

メールマガジン版『音楽の世界』2004年9月号（第7号）

（完）
